

## 課題研究セッション 「高大接続の転機とこれからの初年次教育」

濱名 篤<sup>1</sup>

関西国際大学

### Symposium “A Change of Transition from Secondary Education to Higher Education and First-Year Experiences in Japan”

Atsushi HAMANA  
Kansai University of International Studies

学会大会時の課題研究セッションの議論のまとめをし、本特集のまとめも兼ねている。

[キーワード：初年次教育，高大接続，転機，初年次教育学会，研究]

筆者は、本セッションの企画者・討論者として参加した立場から、以下では筆者からのコメントと質疑をまとめるとともに、この1年間の課題研究「高大接続と初年次教育」を総括することにする。

#### 1. 課題研究セッションの総括

筆者が登壇者たちに問いかけたのは「何が高大接続の課題なのか」というテーマの中でも、1) 課題の多元性・複雑性、2) 大学入試は何を測るためのものか、3) 評価の持つ重要性についてなどであった。

及川報告に対しては、1) 適格者主義への転換後の高校教育の中で、単位認定が校長権限であり、標準化されていない状況の中で、高校教育の学修成果をひとつの物差しで測れるのか、2) 高校の適格者主義以降の経験が、“大学全入”に向かう大学にどのような教訓をもたらしてくれるのか、3) 及川報告で紹介された都立三田高校の M-project のような探求型学習の効果は大きいものがあったが、学力的にどのレベルの高校でまで実施可能かを質問した。

1) については、単一尺度は難しく東京都の場合、都教委が示す3つの目標レベルから

---

<sup>1</sup> 関西国際大学 hamanaa@kuins.ac.jp

各高校が選択して到達目標レベルを設定している状況が説明された。2)については、教育委員会主導での習熟度別取り組み、総合学科など様々なタイプの学校を設置した取り組みをしてきたことは、今後の大学での多様化への対応にとって参考になるのではないかと述べられた。3)については、教科型と探求型の両立は教員にとっても生徒にとっても負担が大きく、どこでもできるものではない。高校教育は大学入試に左右される傾向が強いので、大学が探求型学習の成果を入試の際にもっと評価することへの期待が表明された。こうした状況は今後の学習指導要領改訂の方向性によって変化していくであろうし、共通履修科目として地理と歴史の融合科目などが出てきそうであり、高校教育での教育内容の共通性が高まっていくと予想しているという発言があった。

川嶋報告に対しては、知的思考方法(知的インフラ)を身につけることの重要性やそのためには評価の方法を変える必要があることも理解できるし、大学入試の評価方法の変更の必要性や大学を4年で卒業させることにこだわらず学修成果を確認して卒業させる方向性には個人的には賛同できる。しかし、こうした方向性に向けて、初年次教育自体が多様化する必要があるという変革が必要であるという指摘については、それならどこが初年次教育としての「共通」部分ととらえるのかを尋ねた。

同氏は、初年次教育の“目的”こそが共通するものであり、機関別、類型別に初年次教育の効果測定を研究していく必要があるのではないかと回答された。同氏によれば、これから高校、大学の並行的多様化が必要になるという。そのためどのような研究が必要かを本学会として考えていくことの重要性を指摘された。

山田報告では、教育接続の重要性が指摘された。アメリカの大学では志願者に高校での学習内容・方法を指定する。高校で学んだ内容の接続を問うからアドバンスト・プレースメント・プログラム(AP)が機能しているのである。高大接続のための教育プログラムを構築するためには、高校教員と大学教員の対話が必要であり、高校教員の本学会への参加を促進していく必要があるという重要な指摘があった。オーバードクターが高校の教壇に立つなどの方法も考えられ、教育内容、教育方法の高大相互乗り入れをはかるなど、“相互浸透型の接続”が必要であることという指摘がなされた。

論議のまとめとしては、高大接続の転機にさしかかり、初年次教育も次の段階を目前にしている。その中で、高大接続のための“万能薬”はないことが明らかになってきた。すなわち、大学のおかれている現状や課題によって、さらには同じ大学内でも学生の背景、属性、経験等によっての多様化が進んできており、学会が自大学のモデルとなる手法を発見し、その方法論や内容を“学び”に來たり、単なる情報交換の場としたりするだけではなく、大学ごとの特性や多様なタイプの学生に応じて、どのような初年次教育プログラムがどのような場合に適切なのかといった研究成果を交換したり、それらの結果を踏まえて新たな教育プログラムを開発するための発見と協働の場としての側面が必要になってきている。

## 2. これからの学会にとっての高大接続

2014年12月に出される中教審の新しい答申の中では、高大接続は大学入試の問題だけに矮小化されるのではなく、大学教育自体も高校までの教育が培うことを期待されてきた“生きる力”を大学教育としてさらなる強化・発展を実現することが求められている。同時に、高校教育も知識注入型の教育のあり方を改めていくことが強く求められている。こ

れまで高校教育の改革が議論されるたびに、その障害として大学入試の在り方が取り上げられてきた。そして、高校教育進学率の上昇とともに、大学入試の多様化の必要性が論じられ、AO入試に代表される入試の多様化が加速し、同じ大学への入り口が多様化・多回数化した結果、大学としても多様な学力・学習習慣・学習目的の学生を受け入れることになり、結果的に大学や大学教育への適応に問題を抱えた学生が増加してきた。しかし、この答申によって大学入試センター試験に代わる新テストが6年後には導入され、1点刻み一発勝負の入試でなくなり、個別大学の入試もより明確なアドミッションポリシーの設定が義務づけられ、それに見合った入試になっているか否かが認証評価の対象になろうとしている。

こうした新しい高大接続システムの大学にとって、アクティブ・ラーニングの導入や学修成果の可視化などと並び、初年次教育の充実は、その必要性和位置づけを再確認されている。大学に入学してくる学生がさらに多様化をしてくる状況の中で、初年次教育を導入していることへの評価の時代から、初年次教育の教育プログラムとしての学修成果や、学生個人の成長や学修成果にとって、どのような効果があるのかが問われるようになってくることは不可避である。高校教育自体も新たな学習指導要領の諮問(2014年11月)に、アクティブ・ラーニングの導入が盛り込まれている。

高大接続の仕組み、とりわけ教育上の仕組みの連続性のなさによって発展してきた初年次教育も、現在直面している大学間の状況や課題の違い、学内で多様化がさらに進行する状況に対し、学生の属性、経験、学力などに基づく類型化も含めた実証的な裏づけを持った初年次教育の効果や有効性を実証して、質保証への貢献の大きさを証明していくことが求められている。高大接続の在り方が初年次教育の普及の引き金になった時代から、高大接続の新たな転換によってその質を高めることが求められる時代に移っているのではないだろうか。